

# どんな幼稚園が

## よい幼稚園でしようか

よい幼稚園での所見(上)

小川正通

ここに抄訳して紹介しようとする「どんな幼稚園が良い幼稚園でしようか」(What is a good Kindergarten?) はウィルズ及びステーション Wills and Segemen 共著の「幼稚園における生活」—幼稚園教師のための手引書 Living in the Teachers, 1950 (II edit.) の第三章「幼稚園のカリキュラム」, The Kindergarten Curriculum 中の第一節である。

昨年二月筆者がシカゴ滞在中に、かつてデューイが創設したシカゴ大学附属学校を見学して、アメリカでも有数な良い学校であると思つた。その際、附属幼稚園主事の Adams 女史 (Olea Adams) にいろいろ話を聞いたが、同女史は自分が序文を書い

ている本書を読むようにすすめてくれた。

本書中、ここに紹介する部分は、少しだからと書いているが、精読すれば、アメリカの幼稚園の実情、ことに保育の実際とその着眼点とをよく描写していると思う。

× × ×

幼稚園は楽しい所である。学年なかばの幼稚園の仕事の時間か活動の時間かに入つていくと、訪問者は多くのものでいつしよ

に作業をしている幸福そうな幼児のグループを見出すことである。あちこちの仕事場からは、やわらかい話声が流れてくるし、先生はグループからグループへと足を運んでいる。シユチュエーションは形式的ではないけれども、注意深い組織があつて

こそ、この忙がしく且つスムーズに運ばれていく仕事(作業)の時間が可能なのである。わたくしどもはグループ内の気安さと教師と幼児間の完全な理解とに感動させられる。

粘土用のテーブルに向つてゐる数人の幼児は、粘土の扱い方において、熟練度を異にしている。即ち赤いドレスを着た女児はなかなか上手に鉢を作り上げた。そばかす顔の男児は、「橋」の建設中である。また最年少の女児は、粘土を押したりなでたり、押したりなでたりしている。そのわけはそれがすてきで、マーマレードのように感じられるからである。教師は幼児をほげまし、求められるときには、手助けをするが、決してレッスンを命じるようなことはない。

油布のエプロンをつけた幼児四人が、二台のイーグルの両側に立つてゐる。そして丸ぼちやの女児は、大きな家を描き、その真中の周囲に左右相称的に、注意しながら花を配置している。黒眼のほつそりした男児は、紙を緑の絵具で半ばうすめた。プラツシを注意深く引き、水平線を描いた。入園早々の男児は、色の上に色を重ねて、大き

ななんともいいようのない「よこれ」にじみができるまで、色で遊んでいる。また女兒が巧に沢山小さい形のものを描いたら、他の最年少の女兒が「おさげ」の髪をふり動かしながら、あの子は「Millions of cats」を描いたと、担任の教師に報告する。

幼児がお父さん、お母さんになり、その兩人と子供三人とが、その製作を手伝ったオレンヂ用木わくの遊び小屋の中で、ままたごと遊びに余念がない。そして八百屋さん一人、リング箱の八百屋の店と遊び小屋との間を前後に歩き廻る。この様子をつぶさに観察すると、八百屋さんが電話（玩具の）で呼ばれた結果らしい。先生は八百屋さんに対して、室内では余り大声を出さないようにと、にこにこしながら助言を与えている。

だぶだぶの父親の古シャツポタンを後ろにして―を着た子が三人、フィンガーペインティング（指絵）に耽つている。その中の二人は、手と肘で大きい渦巻とカーブを描いており、描きながら愉快そうに笑う。一人は手のこぶしで塗りつぶした模様の図案を注意深く描きあげ、それからそれを乾燥用針金にかけた。

積木遊びを見ると、玩具の飛行機の格柵庫製作中であつて、年少児が指図して、他の子が手伝つて作つてゐる。また一つのジェット機を奪ひ合つてゐる二人のいざこざを解決しようと、先生が現場に入り込む。すると訪問者には殆んど聞えないほどの先生の一言、二言で、いざこざは無事解決して、二人は再び幸福そうに遊び始める。

保育室内の小屋で、クラスの多くの子供が明瞭な、大きい、彩色のある絵図の助けを借りて、お話の本を「読んで」いる。また他の幼児達は、子供の唄の気に入りの場面を描いてある木製のバスルで遊び、相似と相違とを学ぶ。

手にクレヨンと紙とをもつた五才児は、水漕のグツビー（小さい鰻帯魚）を観察するテーブルの処に行くのを途中でやめてしまつて、次に科学用テーブルの上に発芽している豆を見、また古い鳥の巢のやわらかい中身にふれようと立ちどまる。

注意のシンクナルのチャイムが鳴つても子供達は聞こうとしない。裏面目な顔付をした赤毛の男児が、ただ一人清掃の時間だと知らせる。すると子供達は、色々な遊び道具をもち運び、ピアノの近くへ一括して

集める。もちろん三、四人の子には、教師が再び仕事の中止を助言しなければならぬ。しかし画を描き続けている子だけに、その完成のため時間の延長が許されるのであるが、その理由はなお四・五才児には、一定時間内の創作が必ずしも容易でないからである。

## 設 備

子供達を見ることをすましてから、訪問者は保育室を見て廻る。新しい建物ではなけれども、室は非常に魅力的である。壁はバステル・グリーンで仕上げられてゐるが、一方の壁には、幼児の作品だけが裝飾となつてゐるし、他方の壁には、床から天井までの大きい窓が設けられてゐる。幼児用の諸道具が壁とびつたり溶けあつてゐるし、ぶちになつた美しいリノリウムが床に敷かれてゐる。飾り台の上には、良い写真が眼を惹いているし、さらに、巧に挿された花が一段と美を添えているように思う。

保育室からトイレトへは直ぐ近いので特別の「トイレットの時間」は不必要である。また「手洗い」が絵を描いたり、粘土

遊んでいるときに、何か一時的な異常がないかどうか常に注意していなければならぬ。

さらに幼稚園では、幼児の安全のために種々配慮するところがなければならぬのである。

### 知的要求を充すこと

幼稚園においても、その程度にふさわしい問題解決のテクニクがとり入れられる必要がある。幼児のもつ問題は、たとい大人にとつては小さく見えても、幼児にとつては重大関心事なのである。それで先生は子供が自分で考えなければならぬような質問を出し、子供自身に答を見出させるように導く。例えば通路を狭くしてしまつた幼児に対して、先生は次のように質問する。

「わたしたちはどうしてドラックをガレツジから運び出すことができるでしょうか」

同一三輪車に乗ろうと争っている幼児には次のように訊ねる。「誰が初めに三輪車を占領したのですか。あなたは長く乗っていたのですか。交代するにはどうしたらいいでしょうか」と。

かような種類の質問を通じて、子供達は

問題をどうすれば根本的に解決できるかについて、学び始める。五才児は行動する前に、考えねばならないということについて多くの経験をもつことが望ましい。従つて教師は子供が自己の行動の可能な結果についても、十分予じめ考えるよう指導するがよい。

例えば、一人の子供が他の子を除き毛布を独占し、身体を伸ばしているときには、次のように訊ねる。「若しみんなが毛布の上に横わろうとすると、一体どんなことが起るでしょうか」、或は「他のお友達は何処にかけられるでしょうか」と。

ジョンがロイを撲つたとする。ロイはジョンが私をぶつた、ぶつたと呼びながら、教師の所へ走つてくる。すると教師は、その手をロイの肩に同情的に置いて、静かにこういうのである。「人をぶつたりするものではないとジョンにおつしやい」と。それを通して、ロイは遊び場での争の解決には、自分自身に頼るべきことを学び始めるが、大人の所へ助けを求めて走るよりも、むしろ悪いことをした仲間に対して、自分の憤激を表現すべきであることを学び始めるのである。

ものを選択することは、楽しみである。子供も大人も、社会では絶えず選ばなければならぬ場合が多いであろう。「われわれの台所で一番好ましいカーテンの色は、黄色かピンクかどう思いますか」、「ピスケットを一取り廻すのに誰か手伝つてくれるお友達を選びなさい」、「あなたが最も好きなお話を選びなさい」、というような示唆を通して、子供の識別力は次第に伸びていく。

### 興味の持続時間を長くすること

四・五才児の興味の持続時間が短いことについては、既に第一章で述べて置いたが部分的には子供の成熟に伴つて、その時間が長くなる。また子供の要求と興味とにふさわしい活動をば、注意深く計画し、指導することによつても、それは発達していくものである。

子供は彼が手がけ始めたことを完成するまでやらねばならない。同一の日に——或は年少の子にとつては、僅な日数内で——完成できるような簡単な仕事を選ぶように指導されるがいい。学年が始るときに、一つの活動から他の活動へと早く移行する時

細工をやる場所の向うに目を引いている。移動式の棚には、必要な適量な教材がならんでいるが幼児達が自分で取り扱えるように低くしてある。

保育室中の小屋の中にある本を見る文庫の所はとくに美しく、光線も十分である。そのチェアには、花の模様をついたクッションが配置されている。鳥籠や魚がかつている水溜や動物飼育のおり、窓の辺にある花かご、ピアノ、蓄音機、とくに設けられた小屋等は、幼児が幼稚園において豊かな楽しい経験を積むのに役立つ道具なのである。

### カリキュラムの内容

良い幼稚園は、すべて園児の年齢層の要求に適合させることに努力している。もちろん一年間のプログラムが立てられているが、それは四才半から六才までの年齢層に対するものである。入園年齢上の資格は、州と地域社会とで違っている。幼稚園のカリキュラム作成に当つては、幼児の肉体的知的及び社会的・情緒的成長の促進が意図されねばならない。

### 肉体的要求を充すこと

筋肉の調整を改善することは、肉体的発達面の一つの目標である。大筋肉を使用し、その熟練度を高める力強い活動のためには、適切な種々の運動場の設備（運動具）が必要であろう。身体全体を用いる活潑なゲームとリズム活動とは、筋肉の発達にも調整にも有益である。年少児達は、歩き・走り・ギャロップをし、スキップをし、跳び、また音楽に合わせて踊るし、揺れる木やどしんどしんと歩く熊、早い飛行機、或いはつま先で歩くプローニー（妖精）の真似をやる。

小筋肉の調整については、一層徐々にやつていくのであるが、そのための材料を取り扱う機会是非常に多い。指、手及び手首の統制と使用の熟練とは、習字（Hand Writing）——それは小学校において教えられる——の必須条件である。そして比較的に小さい筋肉の使用経験と実用的活動とは粘土細工・描画・指絵・リズムバンドの楽器使用、チョークやクレヨン使用、木製のはめ込みパズルの操作等を含んでいるのである。

すべて人は、健康を希望している。園児でも健全な健康的習慣を養い始めるのに、年少すぎるといふことはないであろう。おやつ、トイレットの使用、休息の時間、戸外遊び及び健康検査等は、幼児の健康生活を促進するのに大いに役立つものである。

園児が風邪及び他の伝染病即ち、しつしん、しらみ、ひぜん、とびひのような病気の徴候をもつ場合には、学校看護婦かかかりつけの家庭の医者かが保護してくれるまで教師がその子を隔離して置かなければならない。

一体、肉体的要求に独力で対応することができてこそ、初めて幼稚園生活へ十分順応し得ると思う。幼児は他の物事を処理している間に、自己のジッパ―やボタンの扱い方を知り、自分一人でトイレットを使用したり、手を石鹸で洗つたり、その手を十分かわかしたりすることを学んでいく。

教師、両親及び看護婦は、緊密に協調して、幼児の健康と発達とを見守るべきは当然であろう。身長、体重、調整の増進のデータ、今日までの健康カード、及び成長を指示する仕事の見本、を保持している必要がある。また教師は幼児が仕事をしながら



た音程の音楽が用いられる。恐らく子供達  
は、「お早よう」の歌を歌うであろうし、  
彼等が作業をしたり遊んだりしているとき  
に、彼等自身の歌を創作し、また繰返しの  
リズムを創作し、或はよく知つている幼稚  
園の歌を歌うであろう。また音楽的シグナ  
ルが「清掃」の時間を告げ知らせてくれ  
る。リズム的経験は、飛ぶ鳥の観察、大工  
さんのハンマーの音を聞くこと、リズムバ  
ンドの遊び、肉体的リズムの創作的表現等  
を通じて得られる。もちろん歌の時間には  
多くの歌が配当されている。ピアノと蓄音  
機とによつて、良い音楽を鑑賞するための  
機会が提供される。

園児は良い肉声の音楽を聞き、楽しみ、  
歌が愉しいことを学ぶ。しかし音量を統制  
したり、簡単なメロディーを運んだり、軽  
快な澄んだゆつたりした声を使用したりす  
る能力は、幼児達がいつでも歌い得る歌が  
沢山になつて、初めで可能になつてくる。  
リズムバンドの楽器は、音色が色々であ  
つて、対照的であると同様に、それはリズ  
ムに対し種々のバターンの実験をやつてい  
る。やがて幼児は自己のリズムを創作し、  
オーケストラに合わせる事ができるよう

になる。

身体的リズムの創作表現面は、幼稚園生  
活において、優位を占めていると思う。マ  
ーチ・走る・ホップ・歩く・滑る・跳ぶ・  
スキップ等の基礎的リズムが幼児に教えら  
れるが、それは大筋活動を音楽及びリズム  
に表現する技術を与える手段としてであ  
る。幼稚園ではバターンをもたないフォ  
ク、ダンスが教えられるが、その理由は、  
大抵の五才児では、不必要な緊張を与えれ  
ば別であるが、そうでなければ正確なステ  
ップやダンスの型を指導すること自体が、  
なお無理であるからである。彼等にはお話  
を語る音楽をドラマ化したり、擬態活動を  
行うことは、比較的容易である。

ある。これらの活動に対するアイディア  
は、子供がイニシアティブをとつても、  
先生がイニシアティブをとつても、一向  
差支ないが、その表現と解釈とは、子供か  
ら由来するものでなければならぬ。例え  
ば、先生が「家の歩き方はどういうように  
思いますか」といつていいが、自己の解釈  
をもつて反応するのは、もちろん子供自体  
である。大好きな話がリズム活動となつて  
現れてもいい。また自由と音楽に應じた肉  
体使用の熟練とは、創作的表現を促進す  
る。若し幼児がスキップを試みるときに、  
自分の足にのみ心を奪われることになる  
と彼はスキップの音楽に対して、十分肉体的  
反応をなす自由をもつていないのである。  
子供は時々スキップを覚えるのを助けてく  
れと要求する時がある。しかしそれも彼自  
身の解釈による肉体的反応で、自己を表現  
する機会を求めているのである。——たと  
へ音楽がスキップ音楽であろうとも。彼が  
行進・跳ぶこと・走ること・飛び上ること  
・ギャロップすること等の基礎的リズムを  
マスターし、熟練すると、その時には、自  
己表現の可能性を大いに増進し得るであら  
う。

### 創作的な肉體活動

リズムの拍子或は音楽を肉体的に表現す  
ることは、他の創作的活動への門戸なので

今なお、設備と、人手の不足に、自分の熱と労力とを子供達にさへ、日夜苦心していられる保母さんの事を思うと、或年代に、或人がした保育に、ヒントを得たり、自分を慰めて貰つたり出来るのではないかと思う。

不況時代、戦争時代、敗戦時代と、各々の社会状態は違つても、勤労者地区の、幼く母親の問題、幼児の幸福の問題、一銭と十円の単位は違つても、せがまれるまゝに、無駄使いさせるお小遣いと、母親の育児、家庭教育の向上の問題は、形を変え程度の違いはあつても、何時もつきまといつている。

貧しいものは、保育所から、なんでも貰いさえすればよいと云う母親の考え方が、幼児にも、常に与えてもらうことのみ待つて、自分の努力や我慢で、喜びを克ち得る事を学ばせない。私は、この事を、幼児は幼児なりに、何とかしなければと、その時代、時代に思つた。

最初は、例会のある度に、家々をまわつて出席を求めた母の会が、三年目には、地域の懇談会で、自分達から、勉強会の事を、講習会の事を云い出す様になつた事の嬉しさ、けれど、自分の子供の幸のみ願つて、地域の子供達の悪化には無関心であり、自分本位にものを考えて、自分の都合さえよければ満足な社会生活へ目がむかない母親達は、十五、六年前より、よいと云つても、現在もまだく考え方が開けていない。

こんなことにとりくんでいる保母さん達のために、理論家はつまらないと目もくれなくても、何処かでなされた、さ、やかな幼児との生活のメモが、沢山集つたら、と思う。そしたらら

の、若い人々の胸をうつ「遙なる山河」とは行かないまでも、「大いなる果敢なき夢」とでも纏めるのではないかしら等、とりとめもなく想うのである。

(21頁より)

#### 創作的な言語経験

話し言葉を通じて、自由に自己を表現することは、どんな年齢層の社会グループの生活にとつても、必要なことである。また他人の表現を理解し且つ判断する能力も、同じく必要であろう。園児は一般に読書の抽象的シンボルをマスターできるほど、なお十分に成熟していないし、文字表現のため要求される微細な筋肉調整にも到達していない。しかしこれら二者の熟練に対する基礎は、もともと口頭表現の巧みさにあるのである。自己の経験をグループに怖れず話すこと、他人のアイデアを聞くことを学ぶこと、発表・発音を改め、語いを豊富にすることは、幼児が自己を十分表現し得るための道であらう。また圧迫から子供を解き放すと話をするのが容易になる。幼児がその仲間と思想や活動を言葉の上で共同にする経験が、多大であれば多大であるほど、話をする可能性が大になり、また好むようになれるものである。彼は彼自身の話をドラマ化したり、本の絵を通して創作できるようになり、或は親しいお話を話すことができるようになる。さらに幼児は、話合いや「分配の時間」に参加したり、仲間の職業に事件を報告することにも参加していく。

(未完)